連載

# 市長室からこんにちは

vol. 64

益田市長
山本 浩章

年の初めにはその年の運勢が気にかかります。いや、新年を迎える前からも、雑誌などで「来年の運勢」といった見出しを目にするとついつい活字を追ってしまいます。

「当たるも八卦、当たらぬも八卦」という言葉があります。「八卦」とは『易経』という古代中国の書物に記された「易」の八つの基本図像のことであり、これを二つ重ねた六十四卦によっておおよその運勢を説明し尽くすことができるそうです。

ところで、ここでいう「運勢」とは、ある期間における運気の強さや勢いをいい、本人の心がけや周囲の状況の変化によって左右される性質のものです。せっかくの追い風が慢心によりフイになることもあれば、降りかかりかけた災いを細心の注意で払いのけることもできるのです。

これに対し「宿命」は、生まれたとき、あるいは命が宿ったときにすでに定まっていたもので、個人の力ではどうすることもできません。例えば、生まれた時代と場所、親や祖先、それに人種、血液型などは、生まれ変わりでもしないかぎり、別のものに転ずることは不可能です。

運勢と宿命の中間に位置する概念が「運命」といえます。あたかも「さだめ」のように思われることでも、多くは本人の信念や習慣、実際の行動によって変え得るということです。例えば、偶然としか思えない「出会い」にしても、巡り合わせの元をたどれば、いずれかの時点での言動や選択の結果であるはずであり、やはり運命の一種に違いありません。また、数少ないチャンスを見事つかんだ人はとかく幸運の持ち主と羨ましがられますが、実はたゆまぬ努力と時に大胆な決断によって自ら運命を引き寄せた例が大半といえます。

どうしようもない宿命は前向きに受け止め、小さな運勢の浮き沈みに一喜一憂せず、運命を切り開くために日々精進を重ねることこそが大切と思われます。

幸多い新年となることを念じ、まず「六十四卦」から入ってみました。お読みくださった皆様にたくさんの好運が訪れますように。

## 中世益田講座　我ら、益田氏家臣団！編（全12回）

## 第8回　船頭大賀氏

【問い合わせ先】
市文化財課　☎31-0623

三隅川が日本海に注ぐ北岸に位置する湊浦（浜田市三隅町）―風情のあるこの港町に、中世には大賀氏という一族がいました。大賀家に伝わった「大賀家文書」と、関連する「益田高友家文書」からその歴史がわかります。

永享4（1432）年、周防・長門などの大名・大内持世が三隅湊の兵部左衛門に対して、「分国津々浦々 并 関所、不可有其煩候 也」と伝えています。これは大内氏の領国の湊や関所での通航料を免除するというかなり大きな特権です。この特権は、天文12（1543）年に大内義隆が、同21年に大内晴英（後に義長）が、それぞれ追認しています。大内晴英が承認した際には、その奉行人（官僚）の添え状があり、そこには、ただし、八端帆の舟1艘と六端帆の舟2艘に限るとされており（端帆は帆の横幅、一端帆で90cm前後とされる。八端帆の舟の積載量は約100石＝約28kℓとされ、米俵400個弱が積める）、大賀氏が複数の舟を保有する船頭であったことがわかります。

大内氏から特権を認められる一方、文明3（1471）年に三隅氏家臣と思われる信厚が大賀氏の領地を安堵（保証）しているように、大賀氏は三隅氏の家臣でもありました。

天文24（1555）年に益田氏は三隅氏と戦って三隅の沿岸部を支配下におさめ、大賀氏も益田氏の家臣となります。その後、永禄5（1562）年以前に益田氏の有力な一族である益田兼貴は平戸（長崎県平戸市）を本拠とする松浦隆信のもとに使者を派遣し、交易における協力関係を申し入れています。その使者となったのが大賀主計允です。当時、平戸には後期倭寇と呼ばれる中国人を主体とする大密貿易集団が本拠を置いており、中国の物資がたくさん入ってきていました。

天正3（1575）年に薩摩の戦国武将島津家久が伊勢参りの復路に山陰沿岸を通った際には、浜田で大賀次郎左衛門の屋敷を宿としています。江戸時代に大賀家は石見沿岸に一族を展開して大賀八家と称されましたが、その端緒がすでに見られます。

大賀氏のような有力な船頭を掌握することが、この地域の制海権を握り、交易を進める上で重要でした。